



溝上 泰子

—底辺学と大学地域論の先駆者—

学校法人白梅学園理事長 小松隆二

序 「底辺ブーム」と底辺学の創出

中央からは遠く隔たる山陰地方の大学を拠点に、教育と研究、そして地域活動に一筋に生き、多くの先駆的な足跡や業績を遺した女性がいる。その人の名を溝上泰子（みぞうえ やすこ）という。

溝上は、今は、一部の地域や関係者を除いて忘れられた存在になっている。しかし、もともともつと知られてよいし、記憶されてよい人物である。

溝上は、今から五〇年余り前に島根大学に赴任して以後

の後半生を通じて、殊更他から関心を集めることもない「底辺」とそこで黙々と生きる女性たちと、温かい眼差しをもつて触れ合い、交流を続けた。その結果、一世を風靡した『日本の底辺—山陰農村婦人の生活—』（未来社、一九五八年）に始まる一連の底辺関連著作を通して、底辺に関する調査、研究、出版のブームをまき起こした。そして、独自の「底辺学」を構築するまでになっていく。

その底辺学の出発点となったのが、島根大学に奉職した当時から主唱・実践していた大学やキャンパスを超えて島根、さらには山陰を広く「研究室」と受けとめる視点・方法

であった。今日言うところの「大学まちづくり」「大学地域論」の先駆けである。

あわせて、その間、底辺への視座をもとに、研究者として欠かせないオリジナルな視点や理論化への関心や意欲を失わず、「生活人間学」などを自ら造語、創唱した。

その溝上は、研究者として本格的に歩む最初の一步を白梅学園の前身、東京家庭学園で踏み出している。白梅学園関係者には、それぞれの領域や課題において新しい潮流や時代の先駆け・先導役を果たした人が少なくない。その一人が溝上である。

彼女は、後に短期間の京都の生活を経て、島根大学に転じ、教授として、また自らの造語である「人類生活者」あるいは「複眼生活者」として、「生きる・生活する」という「地球上のすべての人間につながる」（溝上泰子『わたしの人生交響楽』七七頁、影書房、一九九二年）面に着目した生活人間学をかざし、多くの貴重な足跡を標した。とりわけ広く地域を研究のフィールドにして実践活動を続け、以上のような底辺学、生活人間学といった新しい研究領域を設定したり、新しい視点を提示したりするのに顕著な実績を遺した。

日本においては、底辺を記録したルポルタージュは古い歴史をもち、成果も少なくない。産業革命期の底辺であつ

た労働者と小作人の労働・生活の実態を調査・記録した横山源之助の『日本の下層社会』（一八九八年。現在は岩波文庫に収録）は、古典として、いまだに読み継がれている。それに続く流れの中で、溝上は、戦後新たに「底辺ブーム」を先導した。戦後の混乱・荒廃から抜けだして、ようやく経済成長の足音が少しずつ響きだし、労働者・国民の生活水準の引き上げに寄与する春闘が始まった直後のことである。

とはいえ、溝上が関心を寄せ、光をあてた底辺は、明治期のスラム街や非人間的な処遇が日常化した職場を含む劣悪な下層社会と同じ概念のものではない。溝上が底辺に目を向けたのは昭和三〇年代には、戦後の混乱の火種はなお残っていたものの、新しい時代は間違いなく始まっていた。そんな時代に、大都会とは遠く離れた山陰の農村に立つて、そこに日本の基層としての「底辺」を見据え、それを構成し、生活する女性たちに焦点をあわせ続けた。生活でも、労働でも、また健康でも劣悪な条件下にあるとはいえ、貧困や無知が蔓延しているだけのかつての最底辺ではなく、女性たちにも自覚、活動、笑い、未来も全くないわけではない。まぎれもなく、日本の基層である一面の現実がそこには見られるのである。

かくして、底辺の女性たちと交流を深めることで、新し

い底辺概念と底辺学を築き上げ、さらには生活人間学を展望するにいたるのである。

1 誕生、成長、そして学問の道に

(一) 生い立ちと学び

溝上は、一九〇三(明治三六)年一月一日、広島県御調(みつぎ)郡市村(いちむら)字神村(かむら)の農家に生まれた。八女で、長姉とは一九歳も年が離れていた。

郷里の市村は、一九五五年に合併によって御調町大字神村になり、さらに現在は尾道市御調町に変わる。御調町は、中国山脈の山あい、芦田川に合流する御調川とそのいくつかの支流域に広がっている。南部が尾道市や三原市に接する山地である。そのうち、生家のあった神(かみ)は、御調川の中流北西岸に沿う山あいの地域で、川を隔てて商店街のある市(いち)の集落を見下ろす位置にあった。古墳なども残る歴史のあるまちである。

地元で初等、中等教育を卒えた後、一九一八年、三原女子師範学校に入学。一九二二年、卒業後、いったん尾道の長江小学校で教員(訓導)になるが、すぐに奈良女子高等師範家事科に進んだ。当時は東京女子高等師範学校と並ぶ女子の最高学府であった。生家は、神村では中流の農家とはいえ、村全体が決して豊かとはいえない山村であった。高

等教育にまで進学できたのは例外中の例外であり、その頑張りが生涯、溝上を支えていくことになるのである。

ところが、期待した女高師での教育が学問というには余りに深みのないレベル・内容であったのに失望させられる。ただ唯一、木下竹次教授とその教育原理には惹かれた。一九二七年、卒業後、木下の下で、同高等師範付属小学校で六年間、助教諭として教職についた。

それでも、女性差別の冷たい現実を思い知らされるばかりで、一九三四年、三二歳の時に篠原助市のいる東京理科大学教育学科に入学しなおした。一九三七年、同大を卒業と同時に、同大教育学科研究科に入学。時代が悪化する一九四一年、同研究科を卒業するに際して、研究職を希望したが、教育学の乙竹岩造教授に女性は無理と、希望を叶えてもらえなかった。もともと、そのすぐ後に、乙竹が研究所長をつとめる白梅学園の前身・東京家庭学園の教員に採用されることになる。

この白梅の前身校に就職するまでの間、溝上は府立第七高女、中野高女などの講師で生活を支えつつ、論文の執筆は続けた。留意されてよいのは、一九三二年に刊行した『私の家事教育』(東洋図書)に、早くも人間に共通する原点として、また人間全てが共有するという意味で『生活者』の側面を重視し、その言葉を使用していたことである(溝上泰

子前掲『わたしの人生交響楽』(二九頁)。早くから新しい視点や理念の追求には関心が強かったことをうかがうことができよう。

(2) 学者の道に

一九四二年三月、社会教育協会は、精神的・科学的教養を身につけた「真個の日本婦人を錬成する」目的で東京家庭学園を創設する。戦時下にあえて女子教育の必要を訴え、それも教師と生徒の協力・交流や音楽教育を重視するユニークな学校を創設したのである。

そこに溝上は教授として採用された。担当は「家事通論」であった。教育のみでなく、研究をも担う学者としての採用であった。同協会は、同時に付属「教育研究所」を設置するが、その所員にもなり、「国史上の女性と家庭教育」を研究担当する(『白梅短期大学創立二十五周年誌』八・九頁)。その研究所長が社会教育協会の創設者の一人、小松謙助と親しかった、先の乙竹岩造だったのである。

同学園では、溝上は、小石川久堅町の下宿住まいから、ライトの高弟遠藤新の設計になる若葉寮に移り、その舎監も務めるようになる。ここでは、悪化する戦時体制の下で、厳しさと優しさの両面をもって入寮生に対応したと、当時寮生であった中川寿賀子ら一期生は回顧している。なお、溝上は、東京家庭学園に奉職する間、同時に実践女子専門

学校の教授も兼任した。戦時下の特殊状況がそうさせたものであろう。

この東京家庭学園への奉職が、溝上にとつては、研究者としては最初のものであった。小学校や高等女学校での教員経験はあったものの、ようやく研究職ということで、これからは落ち着いて、教育と共に研究に打ち込めるという気持であったであろうが、戦火と逆コースの動きが激しさを増す時代状況は、それを容易には許さなかった。

戦局がさらに悪化する一九四四年三月、東京家庭学園は総動員態勢の下、当局の指導で学園活動を休止せざるをえなくなり、四月には勤労女子青年錬成所に衣替えすることになった。どんな形であれ、女子教育の灯を守ろうとした姿勢の現われであった。

だが溝上は職場を失うことになる。その直後の五月、僧侶・眞宗学者の森と結婚する。それを機に森姓を名のる(溝上泰子『わたしの歴史』三四頁、ほるぷ、一九八〇年。『わたしの人生交響楽』一六〇頁、影書房、一九九二年)。それほど同時に、溝上は、生きることさえ難しいほど危険が増大する東京を脱出し、夫の郷里、琵琶湖畔に押しかけるように疎開する。しかし、二人の関係は冷え、すぐに破局を迎える。

終戦後、平和が戻ると、虚脱状態を乗り越えるためにも、

一九四六年、久松真一教授のいる京都大学文学部大学院で学び直すことにした。そこで家事論を超えて、人間の根源にかかわる哲学も学んだ。この在学中は、高等女学校の兼任講師で生活を立てるが、すぐ後に、京都女子専門学校、ついで京都女子大の教授に就任している。

一九五一年に、戦前から積み上げてきた研究と、東京家庭学園から京都女子大学にいたる教職経験が評価され、島根大学に職を得ることになった。前年来、同大学から教育学部教授として招聘されていたのであるが、山陰という遠隔の地で教職に就くべきかどうか迷い、逡巡していた。恩師たちに相談すると、招聘に応ずるべきという意見で、彼女も決断、応諾したのであった。

京都を離れる日、松江行きを勧めてくれた恩師の久松真一は、列車の停車しない花園駅まで出向き、山高帽とマントの正装で見送ってくれた(溝上前掲『わたしの人生交響楽』四二頁)。かくして溝上は多くの出会いの待つ島根に向かったのである。

2 島根大学での活動

(1) 大学の内外で

松江に着き、島根大学に落ち着くと、新しい環境の下で、溝上は自らの研究の取り組み方を再検証・再検討した。島

根は、神々の故郷、神話の国、文化・芸能・民俗等の伝統に恵まれた都、国際文化観光都市、あるいは水と緑の都、と並べきれないほど多くの売り物を持ち、経済・所得面を除けば生活・研究環境は良好であった。研究者にとっては材料にあふれ、宝庫とさえいつてよかった。

そんななかで、溝上が課題として選んだものは、地域、とくに「底辺」における女性と家庭の問題であった。そのことは、やはり自らが中国山脈の山あいの農家で生まれ、育つたことと無関係ではなかったであろう。しかも、視点や視座として島根県全体、さらに山陰全体を「研究室」にする方法をすぐに打ち出した。

松江に落ち着いてほどなく、山陰各地から、特に女性グループから講演などの声がよくかかるようになった。それに応じて各地で女性たちの暮らしを見、話を聞くにつれ、彼女たちの暮らしがただ事ではないこと、研究・教育に關しては、自分が宝の山に導かれつつあることに気づき出す。これまでになく興味津々たるものがあり、学問的刺激の新鮮さ、強さを鋭敏にかぎ取りつつ、地域活動に傾斜していく。

このような大学やキャンパスを超える溝上の視点は、今でもこそ珍しくないが、当時では極めてユニークで先駆的であった。地域というものが研究・教育において重要である

ことを早くから見通していた。さらに学問に関しては、閉ざされた自分の領分内で勝手に取り組めばよいのではなく、自分や自分の大学を超えて、社会や地域とつながるべきものであること、言葉を換えると、研究・教育というのが足下の地域を足場にしてこそ、より有益な意味を持つてくることをその頃から明確に意識し、実践していた。これらの点が先ず注意をひく。

当時、地方国立大学の研究・教育条件は良くなかった。地域活動と同時に、その条件の改善のためにも熱心に運動を行った。図書館分館長、評議員などに就任、学長選挙などでも、改革派を積極的に支援した。学問をないがしろにする政治屋、あるいは守旧派の教員には厳しくあたった。学長でも、容赦なく批判を加えた(批判を加えられたある学長は「溝上ほど強い女をみたことがない」とつぶやいたという〔前掲「わたしの人生交響楽」六七頁〕)。後に、乳ガンという「惨酷」(溝上泰子『底辺一六年』一六四頁、今井書店、一九六七年)と闘いながらも、研究・教育に執念を燃やした姿が重なってくるであろう。

(2) 山陰の女性たち

山陰の底辺に住む女性たちは、溝上がこれまで触れ、見聞した東京や京都では想像もつかない厳しい環境・条件の

下で生活・労働をしていた。同時に、ただ手を拱いて下層に沈溺したままではなく、多様な生き方で困難に立ち向かってもいた。決して貧しいまま、虐げられたまま、物言わぬ女性たちであり続けるとは思えない人々であった。忘れかけていた郷里の御調や神村の農村女性を思い出させてくれる状況であり、光景であった。

そういった現実をみるにつけ、溝上は「底辺」の女性たちの生き方、考え方、実像を記録するの必要を感じた。遠い少女時代の郷里の女性のことなどを思い出すと、他人事とは思えなくなってきたのである。各地で講演や指導をするだけではなく、自らも学ぶ側で地域という現場に入っていた。女性たちと直接面談・聴取もすれば、手紙・はがきの交換もどんどん実行した。

封建的気風の残る家庭や農作業における女性の位置や役割、三世代同居の現実、亭主たちへの不満、集落・部落や婦人会のあり方、地域ごとの風習・習慣、地域の親分・子分関係、折り鶴会など趣味の集まり・活動、貧しい中からも戦災孤児などを支援する活動、機械化される農作業と農業経営における家ごとの格差の拡大など、いろいろのことや学んでいく。あわせて、山陰に広がる底辺が学びの場を超えて、女性たちにとっても、自分にとっても創造の場にもなっていることも知る。

もちろん、学べるから、面白いからと、問題なく、順調に山陰の女性たちとの交流や聴き取りが進んだのではない。こんなことをやっていいのかわからない、研究にもつとつと打ち込まなくてはならないのではないかと迷い、反省もつきまとうた。「島根大学へいったら、こんどこそ、おちついて勉強してくれよ」(溝上泰子前掲『日本の底辺』三二七頁)。「君はそれでいいのかわからないか、勉強しなくては駄目ではないか」(同、三二八頁)という恩師、篠原助市先生の声が脳裏に焼き付いて離れなかった。

ところが、交流、聴き取り、現地調査が記録として蓄積され、まとまったところで、発信の必要を感じ、出版の運びとなっていく。そんな過程を通して、交流、聴き取りなどで得た生の記録・調査が実は研究成果にもなり得ることに気づいていく。研究成果は、机に向かって難しい著作を読み、難しく見える理屈をこねまわすことからのみ生まれるのではない。大切なことは、現実(底辺)を直視すること、その上でオリジナルなもの、未発掘のものを発掘し、既成のものを超える姿勢と理念化・理論化に対する執念を失わないことであった。その辺のことを、溝上は「底辺」における実践を通して体得していく。

なお松江で活動しだしてすぐ、講演の折に、島根で女性の地位向上に努める岡より子と出会う(吉田トキ江『日

本の底辺』から『山陰の女』へ)『山陰の女——総合誌——』復刊第六号、二〇〇二年一月)。それがやがて、今日も維持されている『山陰の女』を誕生させ(第一次の創刊は一九七六年)、溝上にとつても岡の生き方が山陰における地域活動の指針にもなっていくのである。

3 底辺学の構築

溝上の学究生活で注意を引くのは、常により新しいものを追求しようとする創造性志向である。自らを「生活者」「人類生活者」「複眼生活者」と呼んだのも、自らの学問を「生活人間学」と呼んだのも、その現われにほかならなかった。その生活人間学への最初の実りが底辺学であった。溝上は一九三二年刊行の前掲『私の家事教育』において早くも「人類生活者・溝上」の原点となる「生活者」の用語を使用したことは前に触れた。それほど早くから、既成の概念・理念・流行に拘らない姿勢がうかがえるのであるが、それが一貫しているのである。

すでにみたように、溝上のいう「底辺」は、単純に経済的にも文化的にも極貧の地帯を意味するのではない。もちろん、山陰の農村の女性たちは、経済的にも文化的にも、決して豊かで恵まれていたというのではない。とはいえ、必ずしも特殊で例外的な人たちというでもない。「あたり

まえの地帯に暮らしているということ、あたりまえの人々である」いう側面ももっている。そうではあるが、「到底、ひとりでは背負いきれない重荷を背おいつづけてきた人、背おつている人、暗い農村の重荷を、手を取り合ってもちあげようとする人々……」（溝上泰子前掲『日本の底辺』三二〇頁）であることも否定できない。その意味では、決して当たり前の人たちでもなかったのである。

だから、底辺は、差別、貧困、不衛生・不健康、非文明的・非文化的側面に満ちあふれて、夢も希望もなく、どうしようもないほど暗く劣悪というのではない。確かに「沈黙の地帯」（溝上泰子前掲『日本の底辺』三一九頁）ではあるが、生活には他にない味わい、工夫、良さ、個性もある。伝統や文化もある。しかも、「底辺」とその人たちは、劣悪で最低の底に死んだように沈黙しつばなしで、よりよい方向に上向きできないというのではない。

そこから、貧しさなど劣悪さを固定的なものとして受けとめ、記録するだけではなく、劣悪さから、一方で脱皮・克服する可能性、他方で良さ、個性を生かしつつ、よりよい暮らしをめざす可能性も見据えることになる。だから、底辺とそこに住む人たちは、厳しく苦難が多い中にも、一縷の希望を持ち続けうるような地帯であり、また人々でもあったのである。

そのような多様な側面や性格をもつ底辺を調査し、掘り起こすのに、溝上は、底辺に生活する女性自身に、生きてきた足跡、あるいは生きる現実を語らせ、記録させる手法をとった。しかも年齢は問わず、老若広範囲の女性と交流・交歓した。最初の〈底辺のもの〉となった『日本の底辺』の際でも、長い人とは数年にわたって会ったり、手紙を交換したりし続けた。最初から、底辺の人々は主張したり、ものをまとめたり、記録したりすることはできなときめつけ、上から研究者が研究者の目と判断で記録し、まとめあげることは避けるようにした。

それに、溝上の文章は、ひらがなの使用が多い。それも底辺の女性との交流を大事にした経験から学んだことの実践ともたれよう。また著作や教育に写真や絵を多く使うことも溝上流の特徴の一つであった。それは、写真や絵を文字・文章と共に大切にしたこと、同時に自ら語るよりも、あるいは自らの文章・活字よりも当事者や現場に語らせるという溝上流の手法の現われでもあった。

そういった手法・方法に溝上の底辺学・生活人間学の基礎もあつたし、そこから、彼女の底辺学・生活人間学は出発していた。だからこそ、後に溝上自身が『日本の底辺』の共著者である各世代の女性、母性の方」に謝辞を述べている通り、取りあげた女性たちを対等の「共著者」・主役と

位置づけていたのである。

そういった底辺の現実こそ、日本の全体を構成している単位であり、基礎である。また日本全体としての多様さ、可能性、将来像を形成していく。著名な政治家や、伶俐な官僚や学者のみが時代や社会を先導し、ありかたを決めるというのではなかった。溝上は前掲『日本の底辺』巻頭で言う。「明治このかた近代日本をつくり、そして支えて来た力の根源は地方農村にあった。」（一頁）と。

かくして、溝上の考える「底辺」は、日本全体のお荷物や負の部分とのみ片付けられるのではなく、日本の農村には、普通に見られる現実・状況でもあった。しかも、地域ごとに個性ももっている。それだけに、厳しい現実であるにしろ、まぎれもなく日本全体の基層の一つであり、「沈黙の地帯から掘りあてた、貴重な宝物」（溝上泰子前掲『日本の底辺』三一九頁）に転ずる可能性さえ見られるのであった。

4 白梅学園と溝上の関係

一九六七年、溝上は島根大学の定年を迎えた。このあと、聖カタリナ女子短大（愛媛県北条市。現・松山市）、本州大学（上田女子短大）等で教えることになり、松江を離れることになった。一六年にわたる実り多い山陰地方の生活であった。過ぎ去れば一瞬のようにも思えたが、実に多くのこ

とを学び、発信した。その間積み上げた活動や業績は大きく、重みのあるものになっていた。

溝上は、自らの来歴など誕生、成長、さらに研究者になるに至る足跡の記述にあたっては、東京家庭学園または白梅学園のことには、若干の言及を除き、ほとんど書き残していない。その点からは、残念ながら白梅学園にはそれほど強い愛着や意識がなかったともとれる。もつとも、それは理解できないことではない。溝上の奉職したのは、白梅学園ではなく、その前身の東京家庭学園であったこと、それだけにその後白梅を名のる学園には全く関わりがなかったことからである。

にもかかわらず、溝上にとっては、白梅に発展する東京家庭学園への就職があつてこそ、研究者として本格的に歩み出せたし、結婚という転機にも巡りあえたことも現実であった。実際に、溝上は白梅学園に全く無関心であったのではない。白梅から原稿などを依頼されたときには、白梅学園とのかかわりについてエッセーなどをもつて応えている。その一つに白梅学園理事長・小松謙助（一八八六～一九六二）の死に際して、白梅学園に送った追悼エッセーがある。まだ島根大学教授のときである。短い文章なので、全文を紹介すると、次の通りである。

『へえ！ 小松謙助先生がおなくなりになった？』先生

の御逝去のおしらせを見て、わたしはこんなひとりごとをいいました。年に三回位は必ず東京に出るわたしですのに、全く取りかえしのつかないことになりました。『もう一度お目にかかりたかった』これだけです。『ただもういちどあの温顔に接したかった』これだけです。』（『社会教育に生涯を捧げた人——小松謙助を偲ぶ——』（『国民』三月号特集）社会教育協会、一九六二年）。

もう一つ、白梅学園理事長・短大学長を務めた樋口（小松）愛子（一九一一～一九七四）の思い出を記したものがある。樋口が亡くなり、彼女を追悼する著作（樋口愛子先生追悼録『白梅学園』が三年後の一九七七年に刊行された。それに溝上も『晩秋の三つの夕暮れどき』という一文を寄せている。

一九七三年一月末から二月初めにかけて、日本橋室町画廊で開いた溝上の「幼な史画展」に、樋口が何の前触れもなく訪ねてくれ、三〇年ぶりに再会できたことへの御礼の気持ちも込めたものである。戦時下に別れたまま、一度も会っていないかった樋口が自らの絵の展覧会にわざわざ訪ねてきてくれたのを機に、遠く東京家庭学園時代などの樋口の思い出や「スマートで、広大で、軽快な近代的、組織的な学園」（同前、一八九頁）のことを綴ったものである。戦争末期のモンペ時代にも、時代への抵抗のようにスカートで通したという樋口の回想などはさりげない記述である

が、貴重である。

なおこのエッセーにも「大へんお世話になった父君の謙助先生のことがかうかんできました」とあり、歳月が経過しても心に残っていた小松謙助への思い・感謝の気持がよくうかがえる。

以上の白梅学園に関わる溝上の二つのエッセーは、どちらも温かい心のこもった回想記である。決してお義理で書いたものではない。

溝上が、松江から川崎に居を移してしばらくすると、たまたま近くに住んでいた東京家庭学園一期生の中川寿賀子に久し振りに再会した。そのことから、一期生が集い、溝上の誕生パーティを開くようになった。溝上が島根を離れ、川崎に移ったばかりの誕生日頃のことである。以後、時折りそのような会をもつことになる（戦時下以来長く続く溝上と中川の師弟交流については、溝上前掲『わたしの人生交響楽』一六一、一六二頁を参照のこと）。

このように、溝上と白梅のつながりは、期間は二年と短かったが、溝上の生涯からみても、決して忘れてよいものではないのである。

5 溝上の遺したもの

溝上は、一九九〇年一〇月一日、心不全で生涯を終え

た。享年八七歳。墓石や葬儀の代わりに自らの著作集の刊行も終えて、全国の図書館などへ寄贈も実行していた。本人としてはやるべきことはなし終えたと実感できる悔いの無い生涯であった。

死後の備えも万全であった。戦時下に結ばれた結婚に失敗した後は、独身を通していたので、死後誰にも迷惑をかけないように、気づくことはきちんと処理し終えていた。さらに、死後おさまる自らの墓もすでに用意していた。実は、そこにも独自性・オリジナルにこだわる溝上流が貫かれていた。

生前、彼女はすでに墓所を京都市北区の普門軒に定めていた。没後五ヵ月後によく知られるようにテトラポット型の墓が建立されるが、そこには「溝上泰子の墓」と刻まれた。テトラポットは、どつしりと重く、安定し、大地にしっかりと根を据えていると考えたからである。あくまでも既定のものに縛られない溝上流であった。

溝上の生き方・考え方で惹かれることの一つに、「生きることは芸術」（溝上泰子前掲）わたしの人生交響楽「一二頁」という考えがある。これは、一方で大学教員なら研究・教育という本務に誠実に生きる品格のある姿勢、他方でつねに新しいものを生み出そう、改革に取り組もう、また忘れられたものに光をあてようといった新しいことやオリジ

ナルを重視する研究姿勢が彼女にあるからこそ、生み出された言葉といつてよい。学ぶことに前向きで、より新しいもの、よりよいものを追求する姿勢の産物であり、溝上にとっては、まさに人生も研究も「芸術」の一面をもっていたのである。

そのような溝上の実績・足跡を振り返り、整理すると、次の5点にまとめることができよう。まず①家事論から始まり、底辺学、それに基礎をおく「生活人間学」へと広がる調査・研究、②多くの学校・大学・地域にわたる教育活動、③底辺との交流にはじまる地域活動、④大学における研究・教育の諸条件や環境の整備・改善活動、さらに⑤アジア人留学生など外国人留学生への援助活動である。

①調査・研究活動

溝上は教員として小学校や女学校などで教育活動にも従事しているが、彼女は最初から研究者になることを目指していた。家事・家政学から始まり、底辺学・生活人間学にいたるまで、夢中で取り組んだといつてよいが、その間学問の厳しき、難しさを真正面から受けとめ、既存のものを超え、オリジナルを究める創造的姿勢を一貫させていた。生活者として底辺の女性たちと同じレベルに立つことを意識しつつも、当然のことながらも研究者としての意識も同居させていたのである。

山陰や沖縄の調査や研究に夢中になったのも、無視されているもの、虐げられたり軽視されているものなど弱者に少しでも光をあてようという研究姿勢・生活姿勢の現われにほかならなかった。

それに、研究に関しては、溝上は観念や理念レベルのものとして形式的に、あるいは狭く捉えるのではなく、足下の現実を通して多様なあり方としてしつかり見つめるところから始めることを基本としていた。それは、実践と研究、現場と理論を切り離して別々に考えるのではなく、両者を一体において、また実践も研究に結びつくという考えに基づくものであった。そのことを、自ら底辺に深く関わり、「底辺学」を構築する過程を通して実際に示してくれたのである。

ただ溝上の心残りは、家事学、底辺学なり、さらにはそれらを包含、あるいは超える生活人間学なりを、よき後継者を得て学として十分に展開するまでには至っていないかったことであろう。

② 教育活動

東京家庭学園に職を得るまでは、生活の糧は主に小学校や女学校などの教育活動から得ていた。東京家庭学園以後も、島根大学時代に至るまで、取り組む活動の主要な柱は、調査・研究と並んで教育であった。島根大学時代に、こと

に小学六年生に家庭・生活の意味を講義して各地をまわったことも、教育者・生活者としての自覚と責任からであった。現役引退後も、東京家庭学園の卒業生たちが溝上の誕生日などに集まってくれていたことにも、教育者としての面でも、よき教師であったことが推察できるであろう。

③ 地域活動

底辺学の土台となったものは、地域における交流や活動であった。山陰、ひいては日本の底辺に生きる女性たちとの交流・学習会などを通して、底辺学、さらに広く生活人間学も構想されたのである。最初から、底辺学や生活人間学があつたわけではない。地域やそこに住む住民との交流や学びあいこそ、彼女の学問を育てる母胎であつたのである。

この点で、溝上がとくに留意されてよいのは、島根に赴任した当初から、大学やキャンパスや机上の学を超えて地域と現場を広く研究室と受けとめる視座に立っていたことである。前述の通り今日の大学まちづくりや大学地域論の源流をみる思いで、その慧眼ぶりに驚かされる。

④ 大学の研究・教育諸条件の改善活動

戦後しばらく、地方国立大学の研究・教育環境・条件は、高等教育機関に相応しいとはとてもいえない状態であつた。そのような劣悪といつてよい環境・条件の改善のた

めには学長選挙など政治的活動にも積極的にかわることもした。

⑤ アジア人留学生への奨学金援助活動

死期を悟り、遺言を残すが、あわせて、自らの著作集の刊行を実現すると共に、留学生への奨学金制度などにも最後の仕事として大きな貢献をしている。日本語学校に五〇〇〇万円を寄付し、それを基金に留学生への奨学金が給付されるよう取りはからつたのである。

研究者としても教育者としても、また地域活動家としても、他の誰もできないことを、死期を悟るかのように粛々と実行したのである。

結びに——溝上の方法と業績の再検証を——

溝上の生涯にわたる学者としての理念・理論や業績に関しては、評価は一つではないであろう。生活人間学にしても、一方で家事学・家政学を超え、他方で底辺学をも超える視座にたてたものの、普遍化しすぎのおそれなしとはいえない。ただそうだとしても、その真摯な生き方・姿勢、また弱者や隠れて表によく見えないものを大切にする視点・姿勢には、学者なら、誰もが頭の下がる思いにならざるをえない。

溝上の若い頃の向学心、さらに白梅学園(東京家庭学園)

以後の研究者としての視点や姿勢において、一般の研究者がそれほど関心を寄せることのない地域や人々に、彼女が注意を向け続けたこと、同時にオリジナルなものをたえず追い求めたことは、繰り返すように貴重である。創造・オリジナリティを求めるとは学者にとつては命ほど大切なものであるし、ややもすると忘れられがちであるが、現在でも最も忘れてはならないことの一つである。また「底辺ブーム」と言われるようになるまで、ほとんど見向きもされなかった山陰や沖繩の底辺とそこに住む女性たちにかくも継続的に、しかも積極的に関心を寄せ続けたことも、よそ者では他の誰もがなしえなかったことである。

溝上が拓いた底辺学、そしてよりスケールの大きな生活人間学は、体系として完成、確立したものでも、今日に引き継がれているものでもない。現在、経済的にも、社会的にも、溝上の生き、活動した時代とは環境・状況は大きく変わっている。とはいえ、溝上が道を拓いた底辺学・生活人間学も、彼女による大学・地域関係の認識・視座も、過去のものではない。むしろ現在にも有益・有効な側面をもっている。学問の意義、また研究・教育の役割が混沌として小さくないように思う。

〔参考文献〕

- 溝上泰子『日本の底辺―山陰農村婦人の生活―』未来社、一九五八年
溝上泰子『受難島の人々―日本の縮図・沖縄―』未来社、一九五九年
溝上泰子『変貌する底辺』未来社、一九六六年
溝上泰子『底辺一六年―歴史の眼―』今井書店、一九六七年
溝上泰子『生活人間学―新しい教育学・家政学への提言―』国土社、一九六八年
溝上泰子『わたしの歴史』未来社、一九七三年。ほるぶ、一九八〇年
溝上泰子『わたしの人生交響楽』影書房、一九九二年
『人類生活者・溝上泰子著作集』全一五巻、影書房、一九八六年～八九年
『島根県大百科事典 下』山陰中央新報社、一九八二年、
『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社、一九九七年
『山陰の女―総合誌―』改題第六号(通巻二九号)、二〇〇二年

〔注記〕 本稿執筆に際しては、東京家庭学園一期生で、卒業後も溝上と長く交流を続けた中川寿賀子さん、そして島根県立図書館郷土資料室に大変お世話になった。また溝上の学歴・職歴については、『著作集』第一五巻所収の溝上自筆の「履歴書」に多くを拠っている。